

# 28amG-010

明治薬科大学における地域医療コース演習：耳栓による高齢者難聴体験

○向日 良夫<sup>1</sup>, 下川 健一<sup>1</sup>, 山崎 紀子<sup>1</sup>, 石井 文由<sup>1</sup>, 小関 珠美<sup>1</sup>,  
斎坂 ゆかり<sup>1</sup>, 高村 彰<sup>1</sup>, 山田 俊二<sup>1</sup>, 山田 聖子<sup>1</sup>, 向日 悠子<sup>2</sup>, 向日 玲子<sup>3</sup>  
(<sup>1</sup>明治薬大, <sup>2</sup>三軒茶屋病院, <sup>3</sup>住商ドラッグストアーズ)

【目的】 本学5年生の地域医療コースのプレ実務実習として、耳栓による高齢者難聴体験を実施した。難聴者への服薬指導は、普通大きな声で対処するが、聴覚障害者からは「大声よりもゆっくりと話してほしい」と言われる。また、老人性難聴の特長は、音は聞こえるが何を言っているかが分からない状態になる。声の強弱だけではなく、言葉による聞き取り難さも関係するようだ。このような難聴体験－「難聴者にはどう聞こえる？」について報告する。

【方法】 デシガード AB 耳せん、積分型普通騒音計を使用した。検査用音源 CD には、日本聴覚医学会の補聴器適合検査用の指針 (2012) 聴力表 (67-S 語表：第 1、2 表) を使用した。「ア」、「オ」など 1 音ずつ聞き取る「語音弁別検査」を、70dB と 60dB(1000Hz) で耳栓なしと両耳栓使用で実施し、どれだけ聞き取れたかを語音明瞭度(%)=(正答語音数/検査語数)×100 で示す。

【結果および考察】 5 年生 88 名の弁別能 (語音明瞭度) は、耳栓なしの 70dB で 98±3% (n=44)、60dB で 99±3% (n=40) と検査音の強さでの差が見られなかったが、両耳栓使用の 70dB で 94±7%、60dB で 87±10% と弁別能が下がり検査音の強さの影響がみられた。このことから、聞こえ難さには大きな声で対処すれば良いように思われるが、さらにその影響に加えて、耳栓をすると音がこもったように聞こえ、子音がハッキリしなくなる。特に、「は」を「か」や「た」に、「り」を「び」に、「た」を「か」や「さ」に聞き間違えることが分かった。この「言葉がハッキリしなくなる」現象により、情報提供時に慣れない医薬品名などは正しく伝わらなくなることが考えられる。学生達は今回の体験により、聞こえの低下した方に「ゆっくりとハッキリと」話すことの必要性を理解した。